

一 《熊野》の主題——先行研究から

《熊野》はどのように読むことができるのだろうか。佐成謙太郎氏^{注一}は《熊野》の宗盛について、「我儘なそして風流な平家公達の風格がよく現れて居り、シテ熊野については、夫命に反抗することの出来ない、老母の事を思つて忘れる事の出来ない、弱い優しい性情がよく描かれてゐる。」と述べる。山崎正和氏^{注二}は、「主題が春である以上、背後に冬の死のイメージがあるのは当然で、花と病母、観樂と哀傷は人物の心理とは別に、ただ観念の衝突のドラマとして読むこともできよう。」と言われる。天野文雄氏^{注三}は山崎正和氏の「観念の衝突」を「現実的な母親の死と過ぎゆく春を惜しむ気持の衝突」と捉える。そして、「惜春という美的感情と、母親の病気という現実との対立は、《熊野》ではどちらが重く扱われているのか。(中略)作者はどちらかといえば惜春といふ美的な感情のほうを重くみているのではないかと私には思われます。」と言われる。また伊藤正義氏^{注四}は、「熊野」は、人みな浮き立つ花盛りの桜のもとでの佳人の憂愁と、歌舞の功による歡喜の婦心を主題とする能に仕立てられているとする。《熊野》の先行研究の流れには、佐成氏のように登場人物の状況・性格を現実的に描くことを中心に据えた「現在劇」として

捉える見方と、山崎氏・天野氏のように「観念劇」として捉える見方と、両方があるように思う。この問題を念頭において、《熊野》を読んでみたい。

二 『平家物語』における熊野

《熊野》は、『平家物語』巻第十の平重衡の東下りの挿話を素材とする。鎌倉に護送される平重衡が、池田の宿の熊野の家に泊まったとき、熊野が和歌を送る。この歌に感動した重衡は梶原に歌の主について尋ねる。この部分^{注五}を引用すると、

三位の中將、梶原を召して、「ただいまの歌の主はいかなる者ぞ。やさしうもつかまつりたるものかな」とのたまへば、景時かしこまつて、「君はいまだしろしめされ候はずや。あれこそ、屋島の大巨殿の当国の守にてわたらせ給ひしとき、召されまゐらせて御最愛候ひしに、『老母のいたはり』とてしきりに暇申しけれども、賜はらざりければ、ころは弥生のはじめにてもや候ひけん、

いかにせん都の春も惜しけれど
慣れしあづまの花や散るらん

とつかまつりて、御暇賜はりてまかりくだり候ひし、海道一の名人にて候」とぞ申しける。

となる。重衡は梶原に、今の和歌を詠んだ女性のことを尋ねる。梶原は、この熊野は宗盛が遠江守であった時に寵愛し、都に連れ帰った女性で、「老母の病氣」を理由に暇を願ったのだが許されなかった三月の初旬に「いかにせん」の和歌を詠んで暇を賜った「海道一の名人」であると述べている。以下、金剛流の現行謡本に沿って、本文を読んで行きたい。

三 宗盛の感情と母の手紙

本曲は、平宗盛の名乗りから始まる。熊野が「老母の勞りと申して度々暇を乞ひ候へども。この春ばかりの花見の供と存じ。いまだ暇を出さず候」とある。「花見のとも」という表現は『和漢朗詠集』注六巻下の「交友」に載る白楽天の「琴詩酒の友は皆我を抛つ雪月花の時最も君を憶ふ」に立脚しており、「雪・月・花など美しいものを見る時間を共有したい」「花見の友」と理解すべきであろう。『熊野』における宗盛と熊野との関係は、「友」である。

朝顔の持参した文の老母の嘆きを引用すると、「何とやらんこの春は。年古り増る朽木桜。今年ばかりの花をだに、待ちもやせじと心弱き」となる。命があつてこそ花に逢うことができるということは、『古今和歌集』巻第一春歌上九七番注七の「春ごと」に花の盛りはありなめどあひ見む事はいのちなりけり」に先例がある。また春はめぐつてきて花は咲くが、それを観る人が古くなり、やがて亡くなるということについては、『和漢朗詠集』巻下「無常」七九〇番注八の「年々歳々花相似たり。歳々年々人同じからず」に代表される漢詩の発想があり、これが纏綿と流れている

と考えてよいだろう。『熊野』における「散る花」を見て人の命、母の命を思うという発想は和歌の伝統を踏まえたものである。また老母は熊野に「命の内に今一度。見参らせたくこそ候へとよ」と述べている。この老母の感情は「老ぬればさらぬ別れのありといへば」という「伊勢物語」第八四段注九の和歌に立脚している。天野氏は「現実的な母親の死」といわれるが、『古今和歌集』以降の伝統表現の範疇で描かれている以上、和歌に立脚した「観念」であるといえる。それゆえに、「花を友とともに眺めたい」と言う宗盛の切実な希望を単純な我儘とは言えないであろう。

四 ともに心を慰まんと

宗盛は「花見の車同車にて。共に心を慰まんと」と熊野を花見に誘う。『源氏物語』葵卷注一〇で、源氏は葵祭の当日、紫上を「君は、いざたまへ。もろともに見むよ」と誘い同車する。この場面も紫上が源氏にとって一番心の安らぐ人であったことを示す箇所だが、宗盛にとって熊野は、ともに同じ花を見て「心慰む」ことのできる存在として描かれている。母親の病気がかりでも花見で心が慰められるという発想は現実的ではないが、花を見ると物思いをしないということも、『古今和歌集』巻第一春歌上五二番注一一に「年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし」とあり、和歌的な発想として伝統がある。宗盛の言動は、和歌の世界においては不自然でも我儘でもない。宗盛も、花を惜しむ気持ちは熊野と同じである。それゆえに、熊野が「いかにせん都の春も惜しけれど慣れしあづまの花や散るらん」と述べたときに「げに哀れなり道理なり」と帰

国を許す。しかしながら、熊野に「東に帰る名残かな」と「都の花」にも名残があることは重要だろう。『古今和歌集』巻第一春歌上六七番〔注二二〕の「わがやどの花見がてらに来る人はちりなむのちぞ恋しかるべき」の和歌は「たとえ私を訪ねるのでなく、花を尋ねたのだとしても、花を愛したことで、私を恋しくおもうであろう」という意だが、「花」への名残は「花」を愛する人への共感に通じる。『能口伝之聞書』〔注三三〕にも「ユヤ、キリ、『只此マ、ニヲイトマト』ニテ立、悪。宗盛ニ無執心也。夕付ノ鳥ガ啼ヨト思ヒテ立、吉也」とある。熊野と宗盛は「花を惜しむ」「友」として完結している。私は、『熊野』を「花を見て寿命を思う」ということと「花を見て心を慰む」という観念の衝突の劇であると思う。『熊野』を観念の劇と見る上で山崎氏・天野氏と共通する。但し、山崎氏は「冬の死のイメージ」と言われるが、『熊野』の死のイメージは前掲の「年々歳々花相似たり」に描かれる春のイメージであろう。また天野氏は「現実的な母親の死と過ぎゆく春を惜しむ気持の衝突」と言われるが、「散る花を見て老いを思い死を思う」ことも、現実というより「春」の観念であると考えられる。『熊野』に関する限り、「現在能」も「観念劇」と捉えて読むべきであろう。

五 「三段之舞」と「短冊之留」

今回廣田師は「三段之舞」「短冊之留」という小書で舞われる。『金剛流小書解説』〔注一四〕に「三段之舞」は、「中之舞の前、ワキに酌をしたシテは、扇を開いたまま、ワキの命を受け、舞い始めるが、心せく体で、舞の掛りの

段、初段、二段を省略して、直ちに三段、四段、五段を舞う。心せくといつても、時間的には現行の中之舞と大差はないが、これは往昔、舞は五段を通例とした時の名残りであろう」とある。『童舞抄』〔注一五〕には、「此舞三段本也。金春・観世同前。口伝」とする。また『幸正能口伝書』〔注一六〕にも「殊ニ金春方ハまいのらず。又、かやうに申てはやくハなし。(中略)此舞を三段と申ならハし候。(中略)遊屋・松風をむかしより中のまいと申也。此心得あるによつて、まいをのらずしてはやし申事にて候。いまハ此舞を五段(と)申事、ならひしらず候故に、五段まい候へバおかしく存候」とある。安土桃山時代にすでに三段で舞う演出が存在した。岡家本江戸初期能型附〔以下『岡家本』と略称〕巻三〔注一七〕には江戸初期において、観世流と金春流の間でこの舞の解釈が異なっていると書かれている。この部分を引用すると、「舞ノ心持、少子細有て替也。金ハ少静也。うかざる拍子と云也。舞五段過、花を見て、「なふく俄に」と脇へ云、舞とめぬ也。舞ノ心持、金には、東へ下りたき心斗にて、舞をまふも、不詳ながらせひなく所望に依て舞心。何となくちとみしかく舞也。ハやしも其心持也。観にハ、いかにものつて、うきくと、後次第舞也。此心は、いかに宗盛の機嫌をとつて、興に乗じらるゝ様にして、暇をもらわふと云心也。」となる。『岡家本』では観世流・金春流ともに舞は五段と考えてよい。ただ、金春流では、「せひなく所望によつて舞うもので「ちと短く」舞い、観世流では宗盛の機嫌をとつて暇を貰うために「うきくと舞う」という。金剛流の「三段之舞」は『童舞抄』『幸正能口伝書』に書かれる舞を三段に舞う演出、『岡家本』に書かれる「短く」舞う演出が小書に発展し

たものと考えてよいだろう。「短冊之留」は、「金剛流小書解説」(前掲)に「短冊之段で、常の通りシテは懷中から短冊を取り出し、歌を案しながらしたためる体で、墨継ぎを三回する。その間にワキはソツと立ってシテの背後に廻り、短冊を覗き込んで『いかにせん都の春も』と上の句を詠じながら脇正面へ出る。」とある。宗盛が短冊を覗き込むことによって、宗盛が熊野の和歌に興味を持っていることが鮮明になる。宗盛は決して我儘で無料な男として造型されているのではないと思われる。

- 注一 『謡曲大観』第五卷 佐成謙太郎 明治書院 昭和六年四月発行 三三三八頁
- 二 『熊野』を讀む 伊東俊太郎「観世」昭和六年一月号 檜書店五〇頁 注三所引
- 三 『現代能楽講義』天野文雄 大阪大学出版会 平成一六年三月発行 三二五頁
- 四 『謡曲集下』伊藤正義校注 新潮日本古典集成 新潮社 昭和六三年一〇月発行 五〇七頁
- 五 『平家物語下』水原一校注 新潮日本古典集成 新潮社 昭和五六年二月発行 一五六—一五七頁
- 六 『和漢朗詠集』大曾根章介 堀内秀晃校注 新潮日本古典集成 新潮社 昭和五八年九月発行 二七五頁
- 七 『古今和歌集』小島憲之 新井栄蔵校注 新日本古典文学大系 岩波書店 平成元年二月発行 四五頁
- 八 同注六 二九五頁
- 九 『竹取物語』伊勢物語 堀内秀晃 秋山虔校注 新日本古典文学大系 岩波書店 平成九年一月発行 一六二頁
- 一〇 『源氏物語一』柳内滋 室伏信助 大朝雄 二 鈴木日出男 藤井貞和 今西祐一郎 校注 新日本古典文学大系 岩波書店 平成五年一月発行 二九七頁
- 一一 同注七 三三三頁
- 一二 同注七 三六頁
- 一三 『細川五部伝書』表章校訂 法政大学能楽研究所編 能楽資料集成 2 わんや書店 昭和四八年二月発行 六一頁
- 一四 『金剛流小書解説 十三』「金剛」連載 檜書店
- 一五 『下間少進集二』西野春雄校訂 法政大学能楽研究所編 能楽資料集成 1 わんや書店 昭和四八年四月発行 六四頁
- 一六 『幸正能口伝書』竹本幹夫校訂 法政大学能楽研究所編 能楽資料集成 13 わんや書店 昭和五九年三月発行 六二頁
- 一七 『岡家本江戸初期能型附』藤岡道子編 和泉書院 平成一九年二月発行 八八・八九頁

補記 本稿は平成十八年度愛銀教育文化財団助成による成果の一部となる。